

# 薬種商が構えた邸宅

## 【金岡家】

金岡家は薬種商を営み、明治以降は初代金岡又左衛門が県議会議員や国會議員を務めたほか、新たに電気事業を興すなど郷土の近代化に大きな業績を残した家柄である。

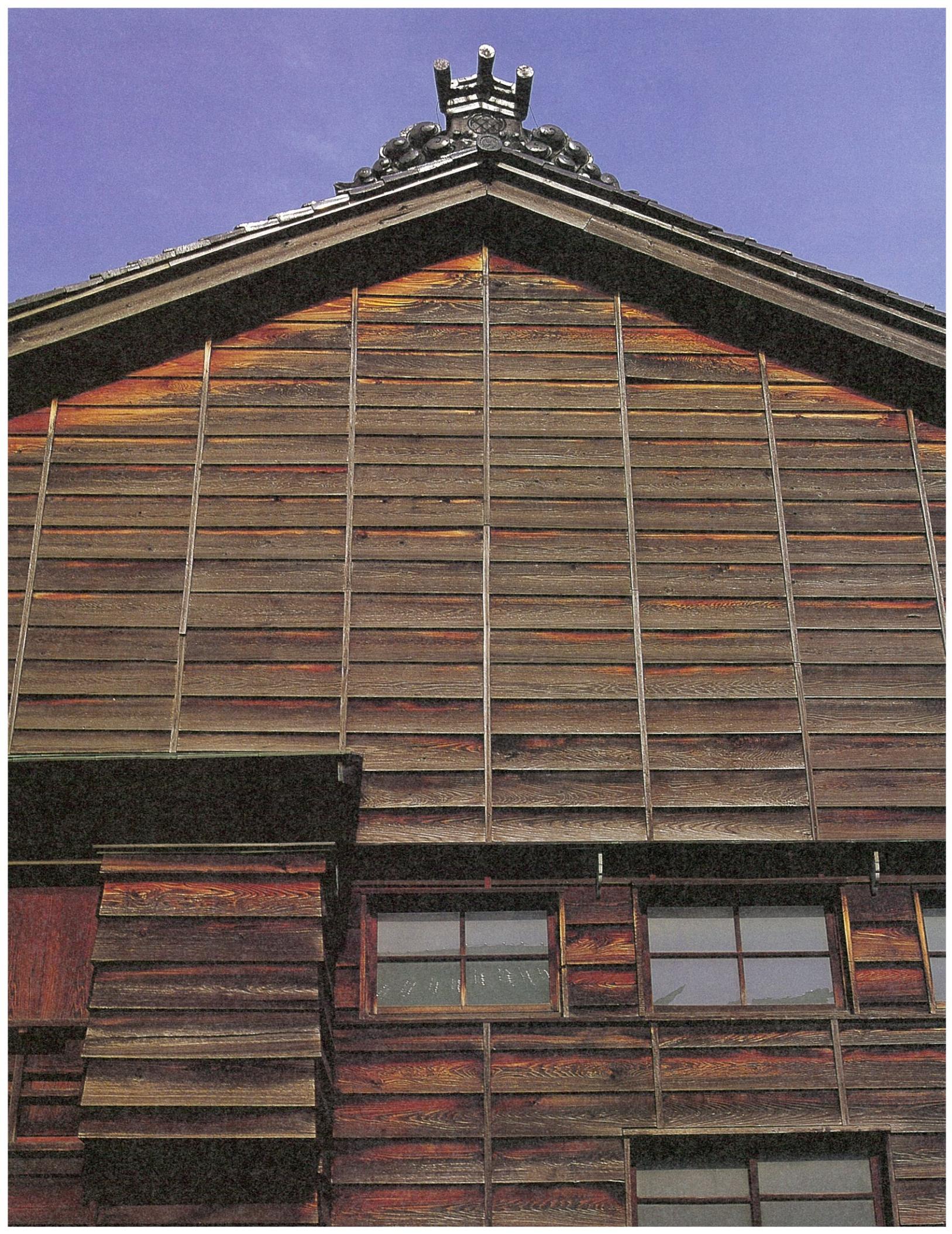
主屋は明治13年(1880)に、客殿は大正12年(1923)に建てられたものである。屋敷は、東側の道路に面して主屋を建て、中庭の奥には大規模な道具蔵や千石蔵など5棟の土蔵を配している。主屋の左側は堀をまわして棟門を開け、右側の客殿は前庭の奥に式台(賓客玄関)があり、客殿の右側には庭園がある。

主屋は間口16.6m、奥行19.6m、間取りは4列5段で、道路に面してミセと番頭室がある。屋根は切妻屋根の桟瓦葺き。正面左側に大戸口、ミセの正面は4間飛ばしの指鶴居を入れて柱を抜いている。また、ミセの壁は漆喰仕上げで、3重の井桁に組んだ梁組みは豪壮である。ガラス戸の外側には雨戸が入り、右端の2間は出格子になっている。外観は薬種商の構えで鶴居の上にはこけら葺き屋根の腕木庇を付け、壁は黒漆喰仕上げ、両側には袖壁がある。

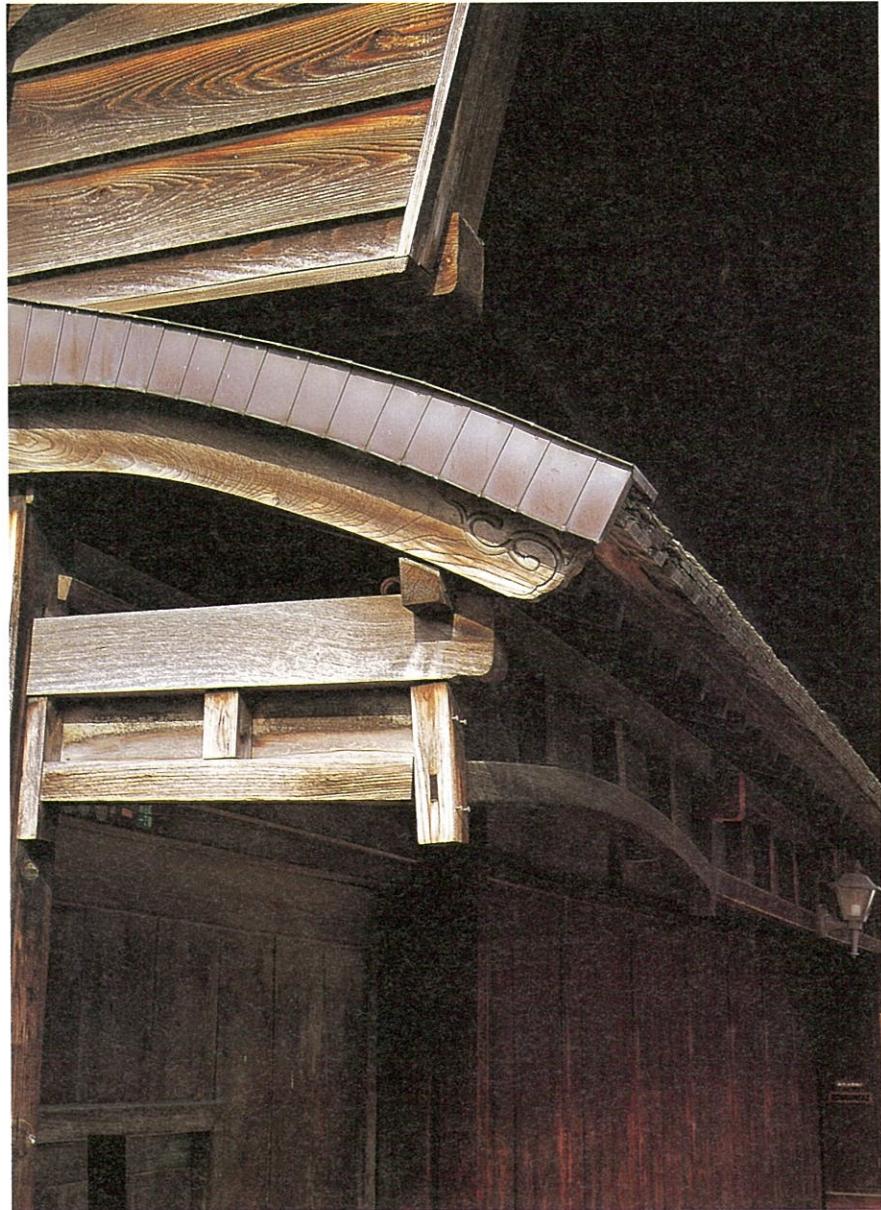
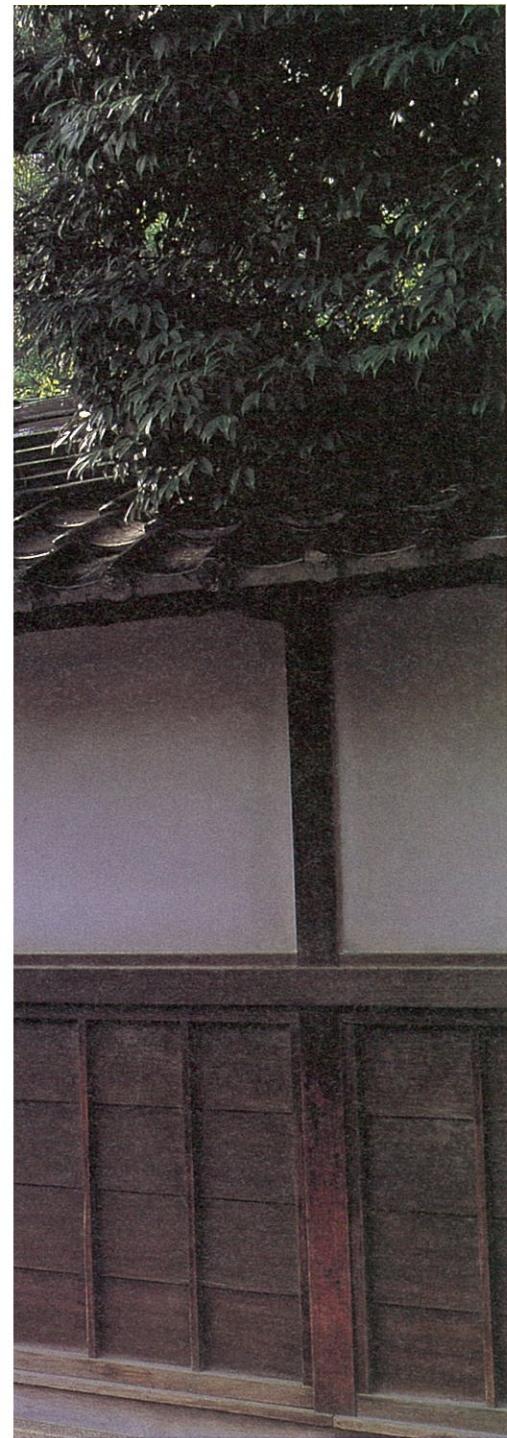
客殿は、大正期の格調高い建築で、式台を中心にして奥に客間をとり、客間両側には畳廊下を、右の庭園側には縁をまわしている。間口10.0m、奥行18.5mで、屋根は入母屋のむくり屋根・桟瓦葺きである。主屋とは渡り廊下で結ばれている。



主屋左側の外壁は板張りで、オイ空間の採光と、小屋組構造を照らすために3つの天窓が付けられている。写真左には、張り出しの高欄が付いた2階縁側がある。正面に比べて簡素な意匠ながら、旧家の趣を感じさせる。



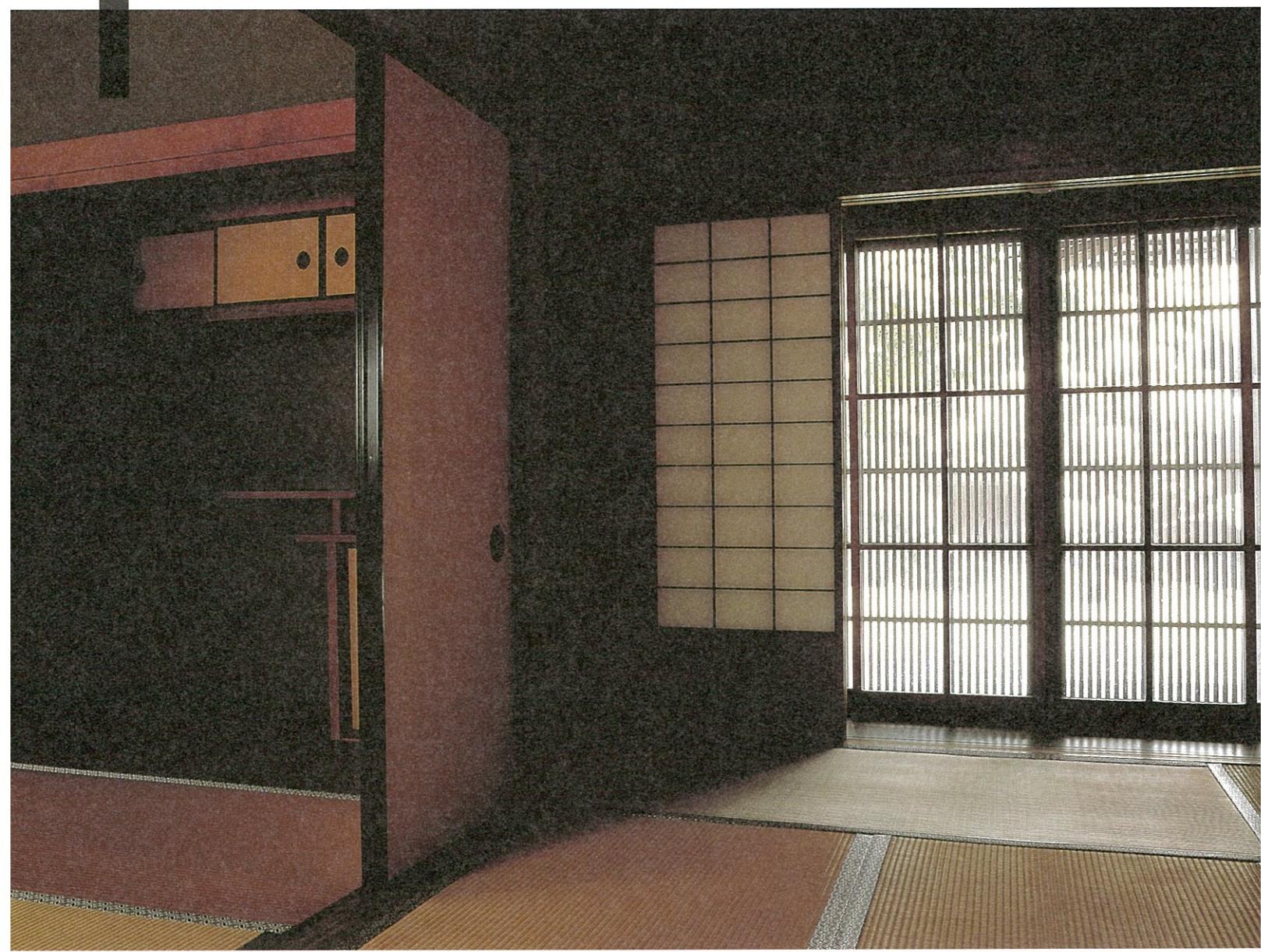




主屋正面にはゆつたりと湾曲したこけら葺きの腕木庇が付けられ、腕木は海老形で重厚な店構えを柔らかな意匠で演出している。軒先には暖簾板を付け、大戸口の出入りにも配慮して湾曲させている。



式台の左右(写真は右側)には6畳の部屋があり、その横には10畳の座敷(床の間)がある。式台は舞良戸で、他は狭間格子。客殿は銘木を多用し、床の間、天井、建具、土壁に至るまで贅を凝らしている。



客殿の客間(座敷)の左右側には畳廊下がある。写真は左側で、廊下の奥には賓客用の浴室・便所が突き出している。客間は18畳と15畳の続き間。廊下のガラス戸は当時のモダンな意匠を伝えている。